

高校生の職業アスピレーションの男女差 —PISAを用いた国際比較—

宮本 香織*

Gender Differences in Occupational Aspirations of High School Students: an International Comparison using PISA

MIYAMOTO Kaori

Abstract

This study examines the gender differences in occupational aspirations of high school students among 29 developed countries, using the OECD's PISA 2015 data. It shows that, only in Japan, girls on average expected occupations with lower socio-economic status compared to boys. The paper uses the Blinder-Oaxaca decomposition to analyze factors, such as the students' plan to attend a four-year university, academic performance as well as the educational level and occupation of the parents. Results show that, in Japan, lower expectation to attend a four-year university and math scores of girls compared to boys are related to their lower occupational aspirations, whereas in other countries, the higher expectation to attend and reading scores of girls compared to boys are related to their higher occupational aspirations. Furthermore, while Japanese fathers' occupations have a more positive effect on boys' occupational aspirations, there was no common pattern in the parents' educational level or occupations having more positive effects on girls in other countries.

Keywords : occupational aspiration, educational aspiration, ISEL, gender difference, international comparison

I. はじめに

日本は他の先進国と比べると、男女間の賃金格差が大きく、管理職比率の差も大きい。本稿はこのような大きい格差は、将来のキャリアを考える高校生頃の段階で、女子は男子と比べて自分が就く職業のイメージが低い事が要因ではないか、そしてそれは何故かを分析する。もし高校時点で既に進学や職業に対する女子の目標が男子より低いのであれば、大学進学意欲も低くなり、就職やキャリアの展開も難しくなるに違いない。政府は少子高齢社会の進展の中で、「女性が輝く社会」を政策目標としている。しかしその実現には、女性の管理職割合の増加、あるいは出産後の職場復帰を奨励する政策以前に、高校生がキャリアを見据えた進路選択の段階で、その意欲を高める政策が必要ということになる。

本稿は、OECDのProgramme for International Student Assessment (PISA) の2015年のデータを用いて、日本の高校生の職業アスピレーションを国際的に比較する。このデータは多くの国に対して統一的な形で調査されているので、日本の高校生男女がめざす職業は、他の先進国とどの様に異なるのか、あるいは類似性があるのかを分析できる。既に職業アスピレーション研究は多岐に渡って行われているが、日本の高校生の男女差を国際比較において注目する研究はこれまでなかった。特に他¹のOECD加盟28か国と対比すると、日本は先進国の中で

キーワード：職業アスピレーション、職業威信、男女差、国際比較

*平成27年度生、ジェンダー学際研究専攻

いかに特殊かという事がわかる。

以下第二節は職業選択に関する先行研究を示す。第三節は、日本を含めるPISA先進29か国について記述統計を示す。本稿では職業アスピレーションを測定するために、国際的な職業威信スコアを用いる。第四節では職業アスピレーションの規定要因の回帰分析を行う。第五節では、要因の男女差が日本と他の先進国とでどう異なるかを検討するためにブラインダー・ワハカ分解を用いる。第六節は、まとめと今後の課題を述べる。

II. 先行研究

先行研究としては、職業アスピレーションを規定する要因の男女差の分析がふさわしい。ところが、実際に就いた職業や教育アスピレーションを主に検討した研究はあっても、職業アスピレーション自体の要因、そしてその男女差を追究し、国際比較したものは多くない。しかもめざす職業の社会経済的地位の男女差を検討しているものとなると、さらに少なくなる。この限界を踏まえた上で、職業選択に関連する先行研究を概観する。

まず古典的な研究は男性のみを扱っていた。例えば米国の1960年代に、ブラウとダンカン¹は、親の学歴と職業が息子の学歴を経由して就く職業に影響する、というパス解析を説明した (Blau & Duncan 1967)。その後シーウェルらは、社会階層は男子の成績と職業アスピレーションに影響する、というウィスコンシンモデルを提唱した (Sewell, Haller & Ohlendorf 1970)。女性を含めた研究では、シューンとパーソンズは70-80年代の英国で同様の結論に達しているが、男女差は検討していない (Schoon & Parsons 2002)。

90年代になると、職業の男女差や女性に注目した研究が増えた。例えばマリーニーとファンによれば、米国の男女賃金格差は、学歴、職業アスピレーション、家族観、親の学歴の違いではなく、雇用側の差別が要因であると示した (Marini & Fan 1997)。ヴェラは90年代のオーストラリアにおいて、親が高学歴か母親が有職であると、娘の就労観は進歩的となり高学歴となるが、職業達成には影響しないと示した (Vella 1993, 1994)。

職業アスピレーションの男女差においては、ルッカーとマッギーが、90年代のカナダのデータを用いて、17歳の男女が目指す職業の威信を比較すると、平均では女子の方が高いとした (Looker & Magee 2000)。ガットマンは、最近の米国では数学の成績は男子よりも女子の職業アスピレーションを高めると示した (Gutman, Sabates and Schoon 2014)。

日本では当初は男女差を比較した研究は少なかった。荻谷は1980年代の男子について、成績の自己評価が職業アスピレーションの判断基準となっていると示し (荻谷 1986)、今田は1995年までの「社会階層と社会移動全国調査 (SSM²)」に基づき、戦後の日本においても、社会階層が男性の職業に影響すると示すブラウとダンカンのモデルが該当する事を確認した (今田1995)。その後平沢も大卒男性の職業威信は、学校歴と強い関係があると指摘した (平沢 2011)。女性については、中山が1980年代の日米の女性管理職を調査し、職業アスピレーションと結婚アスピレーションを関連づけているが、日米の違いは明確にしていない (中山1985)。松村は女子大学の職業アスピレーションは家庭生活への考え方によって変動すると示しているが、職種には触れていない (松村 2000)。

その後男女別に検討する諸研究が増えたが、母親の影響を検討するものは少なかった。片瀬は、1980-1990年代の高校生において、男女とも父親が専門職であることが専門職アスピレーションを高めると指摘したが、母親との関連は分析していない (片瀬 2005)。中尾は、父親の学歴は息子の場合は学歴獲得を通じて息子の現職に影響を与えるが、娘の場合は、学歴を通さずに直接に現職に影響を与えるとした。しかし、母親の学歴の影響は検討していない (中尾 2011)。一方元濱は、母親の教育は現職威信に弱いが正の影響を与えるると示しているが、男女別に比較していない (元濱 2014)。

職業観の男女差の研究もある。松本 (2008) は高校生について、男子は地位条件志向、女子は自己実現志向と生活安定志向とした。またロールモデルは男子は有名人や父親が多く、女子は有名人や母親が多いと示した (松本 2008)。元治は、男性にとって、社会的地位は職業的地位で規定されるのに対して、女性にとっては、職業的地位ばかりでなく、結婚出産及び配偶者の地位達成で規定している、と述べている (元治 2004)。

PISAに基づいた職業アスピレーション男女差に関する先行研究と見ると、2006年のデータを使ったシコラとサハは、調査対象国中4カ国を除く41カ国で女子の方が男子より威信の高い職業を目指していると明らかにした

(Sikora & Saha 2009)。シコラとアポクロベックは、理工医療系について、女子は医療保健系、男子は理工学系への進学を目指しているが、これは各国に共通するジェンダーの文化的な要因であって、理科の成績とは関係しないと結論づけている (Sikora & Pokropek 2011)。

以上で、実際の職業達成、あるいは職業アスピレーションを規定する要因として、本人の特質と親の影響などについての先行研究を概観した³。つまり多くの国では親の学歴や職業は男女の職業アスピレーションまたは就いた職業に影響するとわかった。しかし日本を国際比較の中に位置づけ、その特徴をみる研究はほとんど行われていない。

Ⅲ. 職業アスピレーションの測定とモデル、記述統計

1. 職業アスピレーションの測定と職業ISEIスコア

本稿で使用するのは、OECDが行ったPISAの2015年のデータである。PISAは、世界72か国の約51万人の高校生を対象にした数学、理科、国語の共通テストであるが、学力以外に個人や家庭環境に関する質問もある。その中で、「あなたが30歳になった時にどのような職業に就いていると考えられるか⁴」という問いがあり、それに対して自由回答ができるようになっている。

PISAはその自由回答として書かれた職業を、国際労働組織の定めた「国際標準職業分類」(ISCO)の590の職業カテゴリーに分類している。次に各職業に対し、社会学者ガンゼブームが中心に作った国際威信尺度(International Socio-Economic Index (ISEI))という指標をPISAは適用している⁵。これは日本を含む45か国で、International Social Survey Programmeを用い、ISCOに教育レベルと収入を考慮し、国際的に共通する職業威信を示すスコアとして作られたものである。例を上げると、「清掃者」は14点、「裁判官」は73点で、一般的に点数が高いほど、国際的に威信が高い職業と位置づけられる。

2. 分析方法とモデル

本節では、高校生の目指す職業に対する威信の男女差の規定要因において、日本を他の28か国の先進国と比較する⁶。生徒が30歳の頃に就くだろうと回答した職業のISEIスコア Y を被説明変数とし、先行研究に基づき、説明変数の X として四年制大学進学希望の有無を示すダミー変数、PISAの数学と国語の試験の点数、社会階層を示す母親と父親の学歴(四大卒か否か)及び職業ISEIスコア⁷を入れて、男女でどう異なるか、29か国について最小二乗法を用いて、男女別に推計する。下付き文字 f は女子学生、 m は男子学生、 i は個人を表す。モデルは、以下の(1)と(2)の様に、男女別に行う。

$$Y_{fi} = c + \beta_f X_{fi} + u_i \quad (1)$$

$$Y_{mi} = c + \beta_m X_{mi} + u_i \quad (2)$$

後述の記述統計に示されるように、日本は、国際比較の中では、女子の方が男子より職業アスピレーションが大幅に低い。それはどのような要因によるのか、他の先進国と比較し検討する。そのために(1)と(2)式で得られた推計結果から、ブラインダー・ワハカ⁸分解を行う。すなわち後述(3)式の右辺第1項は、変数効果と呼ぶが、これは男女のISEIスコアの差を、男女の進学希望率の平均値の差や男女の成績の平均値の差でもって説明する部分である⁹。(3)式の右辺第2項は、係数効果と以後呼ぶ。これはたとえば同じ成績でも男女でその影響が異なるために起きる差を示すものである。現実の女子の平均属性 \bar{X}_f を考えた場合に、平均の大学進学希望率や平均の成績が職業アスピレーションに与える影響は、男女で推計された係数の差である($\hat{\beta}_m - \hat{\beta}_f$)だけ異なる。そこで係数の差が平均ISEIスコアの男女差に及ぼす影響を検討する。

$$\bar{Y}_m - \bar{Y}_f = [(\bar{X}_m - \bar{X}_f) \hat{\beta}_m] + [\bar{X}_f (\hat{\beta}_m - \hat{\beta}_f)] \quad (3)$$

上記で日本の男子の方が女子よりも職業アスピレーションが高いのは、それに影響すると示された要因において、女子よりも男子にその正の影響が強く(係数が大きく)、さらに平均値そのものが男性の方が高い事による

からではないか、という事が考えられる。例えば、数学点が職業アスピレーションに与える影響は男子の方が女子よりも大きく(係数効果)、又は男子の方がそもそも数学の平均点が高いため(変数効果)に職業アスピレーションが高くなるのでは、ということ进行分析する。

3. 記述統計

表1は使用するデータの記述統計である。最左欄は、生徒が目指す職業に対するISEIスコアであり、男女別平均を、29か国それぞれで算出した¹⁰。女子の方が男子よりも平均が低いのは、男子の60点に対する女子の55点という日本だけである¹¹。つまり、他の国はすべて女子の方が男子よりISEIスコアの平均が高い。特に日本の女子は、他国の女子のスコアが60から70点台であるのと比べて一段と低い¹²。また親子比較をすると、ドイツ、デンマーク、フィンランド以外は、どの国も子は親の学歴を超えることを目指しており、またすべての国で親のISEIスコアより高い職業を目指していることがわかる。

表1 記述統計

1 #	2 国	3 職業アスピレーションISEI		5 大学進学希望		7 数学点		9 国語点		11 母大卒	12 父大卒	13 母ISEI	14 父ISEI	15 サンプルサイズ
		女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子					
1	JPN	55	60	0.56	0.69	536	556	535	529	0.28	0.45	42	46	3,854
2	AUS	67	60	0.62	0.50	494	504	523	495	0.39	0.34	50	46	9,357
3	AUT	63	58	0.32	0.26	496	522	507	485	0.19	0.23	44	45	4,049
4	BEL	67	61	0.47	0.38	505	519	513	503	0.42	0.42	45	46	2,495
5	CAN	72	63	0.73	0.59	510	526	539	520	0.48	0.41	53	47	11,111
6	CHE	61	56	0.30	0.26	521	536	509	488	0.21	0.28	39	47	3,655
7	CZE	63	56	0.67	0.54	507	516	520	499	0.21	0.22	43	41	3,972
8	DEU	61	58	0.21	0.23	513	540	541	529	0.23	0.29	45	46	3,212
9	DNK	70	63	0.48	0.36	513	523	520	499	0.52	0.40	50	48	1,984
10	ESP	71	64	0.64	0.50	486	505	513	498	0.33	0.30	36	43	4,878
11	EST	68	63	0.54	0.40	524	533	541	517	0.40	0.27	48	44	3,858
12	FIN	63	54	0.35	0.23	520	517	556	516	0.51	0.42	46	44	3,681
13	FRA	65	60	0.38	0.38	507	522	533	515	0.30	0.32	44	46	3,603
14	GBR	70	66	0.53	0.44	501	516	520	505	0.36	0.35	51	50	6,810
15	GRC	73	64	0.80	0.67	465	475	500	474	0.36	0.34	41	45	3,907
16	HUN	61	58	0.49	0.37	496	503	504	479	0.41	0.36	44	41	3,411
17	IRL	68	64	0.53	0.46	500	522	534	527	0.35	0.31	45	44	3,942
18	ISL	70	63	0.49	0.37	497	500	511	473	0.58	0.43	56	50	2,101
19	ISR	73	69	0.67	0.59	477	488	503	483	0.48	0.40	48	51	3,641
20	ITA	65	59	0.40	0.33	494	517	506	493	0.25	0.23	37	43	8,193
21	KOR	64	62	0.82	0.73	532	530	543	508	0.05	0.10	37	46	4,606
22	LUX	65	62	0.49	0.42	491	508	503	489	0.29	0.33	40	45	3,241
23	NLD	62	60	0.18	0.19	521	529	527	508	0.12	0.18	44	49	3,550
24	NOR	69	61	0.33	0.21	511	513	544	508	0.26	0.28	55	53	3,539
25	NZL	69	63	0.59	0.46	503	516	541	511	0.36	0.28	50	48	2,506
26	PRT	69	62	0.45	0.32	483	495	502	487	0.18	0.14	36	41	4,899
27	SVN	65	55	0.29	0.17	498	505	515	475	0.26	0.20	43	41	4,197
28	SWE	66	58	0.47	0.37	506	511	533	503	0.46	0.38	53	49	3,241
29	USA	72	66	0.84	0.77	477	491	521	506	0.40	0.35	49	44	3,664

出典 PISA 2015年データ

Ⅲ. ISEIスコアに影響する要因の分析結果

1. ISEIスコアの規定要因の分析結果

まず、(1) 式、(2) 式の推計結果は表2の通りである。日本の女子の職業アスピレーションに有意な影響を与えるのは、大学進学希望、数学の点数、父親の学歴、母親のISEIスコアである。他国の女子では、大学進学希望はすべての国、数学点数は18か国、父親の学歴は4か国、母親のISEIスコアは16か国で有意な正の影響がある。また日本ではなぜか有意な影響はなかったのだが、22か国で、国語の点や父親の職業ISEIスコアが高くなると、女子学生の職業アスピレーションが高くなる。

日本と他国の有意な係数の規模を比較する。女子が大学進学希望だと、ISEIスコアは上がるが、日本の12.0ポイントの上昇は、イタリアの17.7からイスラエルの5.5までの中位に位置するといえよう。一方、数学の1点の上昇がISEIスコアに与える影響は、日本は0.05とかなり高いといえる。母親の職業ISEIスコアは、日本は0.11で、オーストリアと並び、最も影響が大きい。つまり日本の女子の職業アスピレーションに対して、母親の職業の影響は国際的に強いことがわかる。一方、父親の職業が有意な影響を及ぼさない数少ない国の1つであり、代わりに父親の学歴が有意な影響を与えている。

表2 ISEIスコアに影響を与える要因の回帰分析結果

国	女子							男子							
	大学進学希望	数学点	国語点	母大卒	父大卒	母ISEI	父ISEI	国	大学進学希望	数学点	国語点	母大卒	父大卒	母ISEI	父ISEI
JPN	12.0***	0.05***	-0.01	-1.14	2.75***	0.11***	0.03	JPN	6.9***	0.05***	0.01	1.30	-0.06	0.06***	0.11***
AUS	13.9***	0.01**	0.02***	1.15**	-0.53	0.02*	0.05***	AUS	18.8***	0.01	0.04***	1.30**	1.33**	-0.01	0.06***
AUT	14.3***	-0.33***	0.08***	0.26	1.01	0.13***	0.09***	AUT	13.6***	0.0096	0.051***	-1.53	-0.28	0.04	0.13***
BEL	13.3***	0.03**	0.04***	-0.43	0.35	0.02	0.05**	BEL	14.6***	0.00	0.07***	0.73	-0.95	-0.02	0.15***
CAN	12.4***	0.02***	0.01	0.13	0.41	0.03***	0.04***	CAN	18.2***	0.04***	0.01**	0.84	0.27	0.02	0.09***
CHE	16.9***	-0.01	0.08***	1.88	-0.66	0.05**	0.06**	CHE	18.3***	0.03**	0.03**	2.01*	-0.10	0.01	0.14***
CZE	17.4***	0.01	0.08***	-0.07	-0.24	0.07***	0.02	CZE	16.9***	0.03***	0.04***	0.38	-2.22*	0.08***	0.11***
DEU	9.1***	0.02	0.05***	3.56***	0.17	0.05**	0.10***	DEU	10.7***	0.01	0.07***	1.22	1.20	0.09***	0.14***
DNK	12.2***	0.00	0.02	1.59	0.08	0.05*	0.07**	DNK	11.9***	-0.02	0.07***	1.24	0.73	0.04	0.14***
ESP	9.9***	0.04***		-0.10	1.07	0.02	0.04**	ESP	13.9***	0.01	0.05***	1.59*	-0.91	0.00	0.08***
EST	9.5***	0.01	0.03***	1.83*	0.79	0.01	0.01	EST	7.2***	0.04***	0.02*	1.33	0.44	0.07***	0.07***
FIN	17.0***	0.03**	0.04***	-1.17	4.68***	0.10***	0.04*	FIN	19.3***	0.05***	0.02**	0.67	1.60	0.06**	0.10***
FRA	11.8***	0.03***	0.04***	1.26	-0.04	0.03	0.07***	FRA	13.0***	0.04***	0.04***	-0.66	0.56	0.00	0.11***
GBR	9.4***	0.04***	0.01*	0.33	-0.79	0.03**	0.04***	GBR	9.6***	0.04***	0.02***	-1.22*	1.92***	0.05***	0.04***
GRC	12.9***	0.02**	0.03***	0.43	1.15	-0.02	0.34*	GRC	11.4***	0.04***	0.01	-0.81	0.49	0.05***	0.10***
HUN	11.3***	0.03**	0.05***	2.45**	-0.58	0.02	0.09***	HUN	10.8***	0.04***	0.06***	0.20	-0.36	0.03	0.11***
IRL	9.4***	0.02*	0.04***	-0.80	1.40	0.02	0.02	IRL	9.4***	0.01	0.05***	-0.29	1.13	0.00	0.08***
ISL	8.4***	0.03**	0.00***	-1.29	-0.88	0.07**	0.03	ISL	11.2***	0.02*	0.02*	1.09	1.03	-0.01	0.05*
ISR	5.5***	0.01	0.00	-0.52	-0.34	-0.01	0.01	ISR	5.7***	0.02*	-0.01	-0.04	-0.55	0.02	0.06**
ITA	17.7***	0.01*	0.04***	1.11	0.48	0.03***	0.08***	ITA	16.3***	0.01**	0.05***	0.33	1.07	0.00	0.11***
KOR	10.1***	0.02**	0.03***	0.59	3.14**	0.01	0.06***	KOR	5.7***	0.04***	0.00	1.99	2.58*	-0.01	0.05**
LUX	15.6***	0.03**	0.05***	0.97	-1.03	0.01	0.07***	LUX	12.5***	0.02*	0.04***	-2.70**	0.93	0.03	0.07***
NLD	12.0***	0.02	0.05***	0.56	1.58	0.03	0.04*	NLD	9.8***	0.04**	0.03**	-1.75	0.74	0.04*	0.12***
NOR	13.0***	0.02	0.03***	0.24	1.98**	0.06***	0.07***	NOR	14.4***	0.02*	0.06***	-2.71***	0.93	0.03	0.14***
NZL	9.7***	0.02**	0.02	2.35**	1.31	0.04**	-0.03	NZL	15.4***	0.03**	0.02**	-1.49	3.33***	0.01	0.02
PRT	10.8***	0.03***	0.03***	-1.51	-0.64	0.04**	0.03*	PRT	10.0***	0.04***	0.04***	0.43	0.64	0.03	0.07***
SVN	7.8***	0.03***	0.06***	-0.54	2.08*	0.09***	0.06***	SVN	10.8***	0.03***	0.06***	0.93	-0.40	0.07***	0.12***
SWE	15.3***	-0.03***	0.06***	0.39	1.34	0.02	0.11***	SWE	14.9***	-0.01	0.07***	-1.11	0.74	0.03	0.14***
USA	13.1***	0.02*	0.00	-0.82	0.19	0.05***	-0.01	USA	15.9***	-0.01	0.05***	0.63	-0.60	-0.01	0.10***

出典 PISA 2015データ 有意水準 *p < 0.1, **p < 0.05, ***p < 0.01

次に男子をみると、日本では女子と同様に、大学進学希望、数学の点数、母親の職業ISEIスコアが職業アスピレーションを有意に引き上げる事がわかる。又女子と異なり、父親の職業ISEIスコアは本人の職業アスピレーションを有意に引き上げるが、父親の学歴は有意な結果を与えない。他国の男子では、大学進学希望率はすべての国、

数学点は19か国、父親の職業ISEIスコアはポルトガル以外の27か国すべてで有意な影響を与える。一方女子と同様に、日本の男子では国語の点は有意な影響はないが、他国では25か国において有意な結果が出た。係数において、四年制大学進学希望だと、日本の男子のISEIスコアが6.9上がるという結果は、日本の女子や他国の男子に比べると著しく低い。これは日本の男子は職業選択における「会社員」という分類が大きく、専門職を考え付かないからという可能性がある。一方で、数学点の影響は0.05と、他の有意な国々とあまり変わらない。父母の職業ISEIスコアも他国とあまり変わらない。

以上をまとめると、日本を含め、多くの先進国男女の職業アスピレーションは、大学進学希望と、父親または母親の学歴や職業に影響されることがわかった。成績も関係するが、日本では数学の効果が高いのに対し、多くの国では国語の成績も有意であるが、日本では有意ではないという点で異なる。先行研究で示された様に、多くの国では親のどちらか、あるいは両方の職業が高校生の職業アスピレーションに直接影響を与えていることが明確になった。一方親が四年制大学卒であるか、という関係は親の職業よりも弱い。これは例えばドイツの様に大卒でなくても職業ISEIの高い専門職に就いている人が多かったり、日本の様に大卒でも専業主婦で、娘は仕事をもちたいと思う場合があるからではないかと解釈できる。

V. 男女平均ISEIスコア差の要因の男女差

1. 本人と身近な環境要因の男女差のブラインダー・ワハカ分解の結果

分析結果は表3である¹³。ここで係数効果がマイナスならば、女性係数が男性係数より大きいため、同じXの平均値でも格差が縮小される、ということである。また変数効果がプラスならば、男子の方が平均水準（たとえば数学の点数）が高いことを意味する。

表3 ISEIスコアに与える要因のワハカ分解

国	変数効果							係数効果						
	大学進学希望	数学点	国語点	母大卒	父大卒	母ISEI	父ISEI	大学進学希望	数学点	国語点	母大卒	父大卒	母ISEI	父ISEI
JPN	1.6***	1.1***	0.1	-0.04	0.08	0.00	0.04	-3.6***	-4.0	11.1	0.7	-1.3*	-2.0	3.4**
AUS	-1.6***	0.1**	-0.6***	0.01	0.00	0.03	0.01	2.5***	-3.4	12.2***	0.1	0.6**	-1.8**	0.5
AUT	-0.8***	-0.9***	-1.7***	0.01	0.00	0.14	0.08	-0.2	22.2***	-11.6*	-0.4	-0.3	-3.8**	2.0
BEL	-1.2***	0.5**	-0.4**	-0.01	0.01	0.05	0.13*	0.5	-15.0	14.6	0.5	-0.6	-1.9	4.6**
CAN	-1.7***	0.3***	-0.2	0.00	0.01	0.03*	0.04*	3.4***	11.2**	2.9	0.3	-0.1	-0.7	2.4***
CHE	-0.7***	-0.2	-1.6***	0.01	-0.02	-0.02	0.03	0.4	20.7**	-24.6***	0.0	0.2	-1.5	4.0**
CZE	-2.4***	0.1	-1.6***	0.00	0.00	0.05	0.01	-0.2	8.4	-15.4**	0.1	-0.4	0.2	3.9***
DEU	0.2	0.5	-0.5***	0.07	0.00	0.05	0.11	0.4	-4.4	10.7	-0.6	0.3	1.5	1.9
DNK	-1.4***	0.0	-0.3	-0.01	0.00	0.08	0.06	-0.1	-8.7	28.9***	-0.2	0.3	-0.4	3.4
ESP	-1.4***	0.7***		0.00	0.02	-0.01	0.01	2.0***	-15.3**	25.7***	0.6	-0.6	-0.8	1.8*
EST	-1.4***	0.1	-0.8***	0.04	0.01	0.02	0.00	-0.9	12.6	-7.8	-0.2	-1.0	2.9*	3.0**
FIN	-2.0***	-0.1	-1.6***	0.01	0.10	-0.01	-0.01	0.5	13.1	-8.4	0.9	-1.3*	-1.7	2.4
FRA	0.1	0.5***	-0.7***	0.06	0.00	0.07	0.09	0.5	4.6	0.8	-0.6	0.2	-1.0	1.7
GBR	-0.8***	0.6***	-0.2*	0.01	-0.02	0.06*	0.04	0.1	1.4	5.5	-0.6*	1.0***	1.1	0.2
GRC	-1.7***	0.2**	-0.7***	0.01	0.04	0.00	0.03	-1.0	7.8	-9.4	-0.5	-0.2	2.7***	2.9**
HUN	-1.3***	0.2**	-1.2***	0.09	-0.03	-0.02	-0.01	-0.2	2.6	4.3	-1.0	0.1	0.3	0.8
IRL	-0.6***	0.4*	-0.3**	0.01	0.03	0.02	0.04	0.0	-4.2	5.4	0.2	-0.1	-1.1	2.5*
ISL	-1.0***	0.1	-0.1	-0.07	-0.04	0.14*	0.06	1.0*	-4.7	7.6	1.5	0.9	-4.6*	1.0
ISR	-0.4***	0.1	0.0	-0.05	-0.03	-0.05	0.03	0.1	5.9	-4.8	0.3	-0.1	1.8	2.2
ITA	-1.1***	0.2*	-0.5***	0.06	0.02	0.04	0.11**	-0.5*	1.9	3.5	-0.2	0.1	-1.3**	1.4
KOR	-1.0***	0.0	-1.2***	0.01	0.07*	-0.03	0.04	-3.2***	13.9**	-17.7***	0.1	-0.1	-0.7	-0.6
LUX	-1.1***	0.4**	-0.6***	-0.01	-0.01	-0.01	0.01	-1.3**	-1.1	-2.6	-1.1**	0.7	0.5	-0.1
NLD	0.2	0.1	-0.9***	0.01	-0.01	0.04	-0.05	-0.4	11.1	-8.4	-0.3	-0.1	0.5	4.0**
NOR	-1.6***	0.0	-1.2***	0.00	0.01**	0.04***	0.04***	0.3	0.9	12.1*	-0.8**	-0.3	-1.6	3.7**
NZL	-1.3***	0.3*	-0.4	-0.01	-0.01	0.01	-0.05	2.6***	2.5	4.9	-1.4***	0.6	-1.5	2.6
PRT	-1.4***	0.4***	-0.4***	-0.07	-0.03	0.06	0.05	-0.3	2.4	5.5	0.4	0.2	-0.4	1.5
SVN	-0.9***	0.2**	-2.3***	0.00	0.00	-0.04	0.01	0.5**	1.3	0.6	0.4	-0.5	-1.0	2.3*
SWE	-1.5***	-0.2	-1.7***	0.01	0.04	0.02	0.09	-0.1	12.7	7.2	-0.7	-0.2	0.6	1.2
USA	-0.9***	0.2	0.0	-0.03	0.00	0.09*	-0.02	2.1	-12.3	26.2***	0.6	-0.3	-3.0**	5.1***

出典 PISA2015データ 有意水準 *p < 0.1, **p < 0.05, ***p < 0.01

まず変数効果の方を見ると、日本では進学希望や数学の点の平均値は男子の方が高い。この結果、変数そのものの差によって、男子の職業ISEIスコアは、女子よりも、それぞれ有意に1.6点と1.1点高くなることがわかる。一方、係数効果を見ると、日本では、大学進学希望の効果は女子の方が男子よりも大きく、大学進学希望がある女子の職業ISEIは有意に3.6点高くなる。また父が大卒であれば有意水準10%であるとはいえ女子のISEIスコアが有意に高くなる。ただし父親の職業ISEIの効果は男子の方が大きく、同じスコアであっても、有意水準5%で男子の方が3.4点高くなることがわかる。

他国の変数効果を見ると、女子の職業ISEIスコアが男子より高くなるのは、進学平均希望率が28か国中25か国(89%の国)で男子より有意に高いからであり、また国語平均点も21か国(71%の国)で男子より有意に高いからだと思われる。一方、数学平均点は、男子の方が15か国(53%の国)で有意に高い。係数効果を見ると、女子には半数以上の国が共通する要因はないが、父親の職業ISEIが高くなると、男子の職業ISEIは12か国(43%の国)で有意に高くなり、大学進学希望だと8か国(21%の国)で有意に高くなる。

以上を言い換えると、日本で男子が女子より平均的に職業アスピレーションが高いのは、四年制大学への進学希望率と数学の点が平均的に女子よりも高く、また父親の職業威信の影響が男子の方により強いからという事がわかった。一方他国の場合、女子の方が男子よりも平均的に職業アスピレーションが高いのは、多くの国では、女子の方が大学進学希望率と国語の点が平均的に高いからである。さらに数か国では、国語点や母親の職業威信の影響が女子の方により強いという結果も見られたが、そう多くはない。一つ重要な点は、大学進学希望が、日本と韓国のみ男子よりも女子の方に、将来目指す職業を高める効果があるということである。つまり、ひと昔の様に大学へ行くのは仕事ではなく主に良い結婚相手を見つけるためだ、とは言えなくなったという事だ。もう一点は、日本の女子は男子よりも国語の点数が高いにもかかわらず、職業アスピレーションを高める有意な要因にはなっていないという特徴がある。

ここで他国において、何か特徴的なパターンがあるかどうか検討してみた。女子の方が男子より職業アスピレーションが高いトップ5か国は北欧か東欧諸国である。イエスタ・エスピング＝アンデルセンの福祉レジーム論に基づいた社会民主主義国、保守主義国、自由主義国(Esping-Andersen, G. 1990)等に分類し、何か共通の特徴があるかどうかを検討したが、際立った特徴は見いだせなかった。これは今後の課題である。

さらに日本の女子は四年生大学進学希望ならば、高い職業アスピレーションを持つ、というよりも、高い職業アスピレーションを持っているので、大学に行きたいと思う、という内生性、逆因果関係、あるいは同時性や循環論法があることも考えられる。そこで大学進学希望を目的変数とし、職業アスピレーション、数学と国語の点数、親の学歴と職業を説明変数としてさらにブラインダー・ワハカ分析をすると、職業アスピレーションの係数効果は10%の有意水準で女子にプラスに働くという結果を得たため、このような逆因果の関係があることは否定できない。

VI. 結論

1. まとめ

本稿は、高校生の職業アスピレーションの男女差を、PISA2015年のデータを使い、日本を含める29か国の先進国で比較した。まず29か国の中で、日本だけ、女子の方が男子よりも職業威信が低い。そこで被説明変数に国際職業威信尺度(ISEIスコア)を用い、他国で女子の方が男子より平均的に高い威信のある職業を目指しているのに、何故日本だけ女子の方が男子よりも職業アスピレーションが低いのかを検討した。まず先行研究に従って、大学進学希望、数学の点、国語の点、親が四年制大学卒、親の職業のISEIスコアが与える影響について回帰分析を行った。その結果、日本の場合、大学進学希望、数学の点数、母親の職業威信が、男女の職業アスピレーションを高める点は共通していることがわかった。これは多くの先進国でも同じ様な結果が出たが、それに加えて他の国々では国語の点数や父親の職業威信が男女の職業アスピレーションを高める点も見られた。

次に日本では何故男子の職業アスピレーションがより高く、他国は女子の方がより高いのかを検討するため、関係する要因において、それぞれが職業アスピレーションに与える要因の男女の平均差によるものなのか、それとも係数の男女差なのか、ブラインダー・ワハカ分解を行った。まず本人の特質に関して、日本では女子の方が

男子より大学進学希望率と数学点の平均が低いことが、職業アスピレーションを下げている要因であることがわかった。これに対して他のほとんどの国は、大学進学希望率と国語の平均が、男子より女子の方が高いため、女子の職業アスピレーションを高めている事が示された。ただし日本の女子の数学の点数は、日本の男子より低いとはいえOECDの中では他国の男子を含め最上位にあることも合わせて指摘したい。

続いて親の社会階層に関しては、日本では父親の職業が同じなら、女子に比べて男子の職業アスピレーションを高める影響が大きい、母親の学歴や職業威信は有意な影響をもたらさない。他国でも、母親の学歴や職業が同じなら、男子よりも女子の職業アスピレーションが高くなる国は、それぞれ4、5か国しかない。つまり日本においては、父親の職業がより男子の職業アスピレーションに影響する。しかし他国でも、親の学歴や職業は、女子よりも男子の方を高める国の方が多い。

2. 研究の示唆と今後の課題

本稿で先進国の中で日本だけ女子の方が平均的に職業アスピレーションが低いのは、大学進学希望率と数学の点数が平均的に女子の方が低く、父親の職業の影響が女子よりも男子により強く影響するから、ということがわかった。一方他国の場合は、女子の方が職業アスピレーションが高いのは、大学進学希望率が高く、国語の平均点が高いからだ、親の学歴や職業の影響が女子の方に強いから、というパターンは見出されなかった。

残された問題としては、女子の数学の点数は国際的には高いこと、国語は日本の男子よりも高いのに、何故それが男子と比較して職業アスピレーションに有意に影響しないか、という点がある。そして何故他の先進国では女子の教育アスピレーション（大学進学希望）が男子より高いのか、また国語の点数が男子より高い事が職業アスピレーションを高める要因となるのか、という疑問もある。社会階層についていえば、日本では父親の職業威信が何故男子により強く影響するのかという点も追究する余地がある。

最後に、特に女性の就労は本人を取り巻く国の制度、働きやすい雇用環境、それに対する認識、社会に存在するロールモデルなどの社会環境が重要な要因となる。この点について、29カ国データから相関関係を見ると、母親の平均大卒率が父親の平均大卒率に対して高くなる国程、女子の平均職業アスピレーションが男子に対して高くなる、という簡単な結果が出たが、社会環境の影響については今後の研究課題である。

この研究からの提言としては、女性の能力や労働力の有効活用を促進するためには、高校の早い段階で、女子にキャリア開発や四大進学を奨励する進路指導を行う必要が挙げられる。他国とは対称的に、日本は男子よりも女子の方が進学希望率が低い、進学希望者に限れば、女子の方が男子より職業アスピレーションが高い。従って女子の間で四大進学希望者をもっと増やすと職業アスピレーションも高められると考えられる。さらに、日本の女子の数学レベルは国際的には最高位なので、女子には自信をもって、職業に対する志を高めてあげるキャリア指導をすると効果的であろう。なお表1のとおり、他国では女子の方が男子より数学の平均点が高い国は数か国ある。女子は先天的に男子より数学が弱いとはいえないことは、教育の中で強調すべきであろう。最後に、女子が実力に見合った職業を選んでキャリア形成をする様に、国、教育機関、メディア、企業等は、ロールモデルとして活躍している女性をもっと積極的に紹介し、その上で女性が働きやすい環境作りや働き方、女性の就労に影響する税制や育児保育にかかわる制度などの見直しを行うことが必須の課題である。

【註】

- 1 ラトビアとリトアニアは調査の段階ではOECD加盟国ではなかった。ポーランドとスロバキアはデータが不十分で、加盟国でも発展途上国のメキシコとトルコは、先進国と違って15歳の就学率はそれぞれ77%と90%と低かったので除いた。その他のOECDの加盟国でない途上国約40か国も、高校就学率は高くはなく、データが不完全な国が多いので、本稿では取り扱わない。
- 2 The National Survey of Social Stratification and Social Mobilityの略。社会学者が社会階層、職業、教育、社会意識などに関する調査を、1955年以降10年に一度行っている。
- 3 その他社会環境も影響とするが、字数制限上本稿ではこれには触れない。
- 4 英語では、“What kind of job do you expect to have when you are about 30 years old?”という質問である。
- 5 日本国内での職業威信と海外の職業威信とは若干異なる可能性がある、SSM2005年調査での職業威信スコアを日本男女学生の上位10職に適用した。その結果、ISEIと類似の点数付けが多く、SSMのスコアに置き換えても、女子の方が平均的に男子よりも目指す職

- 業の威信が低いとわかる。SSMの職業威信調査は、例えば太郎丸博が説明している（太郎丸1998）。
- 6 日本（JPN）以外、オーストラリア（AUS）、オーストリア（AUT）、ベルギー（BEL）、カナダ（CAN）、スイス（CHE）、チェコ（CZE）、ドイツ（DEU）、デンマーク（DNK）、スペイン（ESP）、エストニア（EST）、フィンランド（FIN）、フランス（FRA）、英国（GBR）、ギリシャ（GRC）、ハンガリー（HUN）、アイルランド（IRL）、アイスランド（ISL）、イスラエル（ISR）、イタリア（ITA）、韓国（KOR）、ルクセンブルグ（LUX）、オランダ（NLD）、ノルウェー（NOR）、ニュージーランド（NZL）、ポルトガル（PRT）、スロベニア（SVN）、スウェーデン（SWE）、米国（USA）の28か国である。
 - 7 他にも身近な環境要因として、親の期待が挙げられるが、PISAでは、STEM系職種に期待する質問はあっても、職種全般に対するものはないので、この側面については検討できない。
 - 8 杉橋やよい（2009）は、男女賃金格差の要因分解にブラインダー・ワハカ分解を利用することの問題点として、変数効果には、係数効果に含まれるべき差別が影響している可能性がある指摘している。つまり、本稿なら、女子の教育アスピレーションが低いのは、既に女子は四大に行かなくてもいい、という差別や固定観念が一般的にあるからと考え、これは本来なら係数効果に含まれるべき、ということだ。
 - 9 本稿のブラインダー・ワハカ分解では、女子が男子と同じだった場合、と仮定する。
 - 10 被説明変数か説明変数における欠損値は除去した。するとデンマークと英国はサンプルサイズがそれぞれ57%と58%に減ってしまう。その他の国は71%から90%である。つまり職業アスピレーションと親の学歴や職業を答えられた生徒のみの男女差を検討していることになる。この調査では家族構成の質問はなく、一人親家庭かどうかはわからない。一人親家庭の生徒でも、一緒に住んでいない親の学歴や職業を回答していれば分析に含まれる。このため一人親家庭の生徒を排除しているとは言えないが、一人親であるためにもう片親の学歴や職業を回答できていないとすれば、一人親家庭は分析対象からはずれやすいとも考えられる。なお分析に用いたサンプルの記述統計の分布は、全サンプルの記述統計の分布と大きくは乖離していない。
 - 11 専業主婦はISEIスコアがないので、0点としたが、回答した生徒の間では、日本女子でも2.3%しか選んでおらず、他国はほぼ皆無に等しいので、男女の平均ISEIスコア差にほとんど影響しない。
 - 12 ここで具体的な回答のイメージを掴むために、日本で最も回答の多かった職業を男女別に比較する。女子の上位10職とISEIスコアを見ると、比較的低い20-40点台の一般事務員、保育従業者、理容師、小売店主の他、中位の60-70点台の看護専門職、事務所監督員、教育専門職、ソーシャルワーカーが含まれ、比較的高得点である80点台の職種は薬剤師だけだとわかる。しかも専業主婦は10位に入っている。男子では、40点台の一般事務員、50点台の警察官やスポーツ選手、60-70点台の事務所監督員、教育専門家、ソフト開発者、科学工業分野の専門家や機械技術者、80点台の建築士と医師が含まれる。以上、男女上位10職のISEIスコアにウェイトをかけて平均すると、女子は49点、男子は63点で、男子の方が総じてISEIスコアの高い職業を選択している。それに対してたとえばフランスの女子の上位10職には80点台の専門医、弁護士、一般医、獣医、心理学者や70年台のジャーナリストが含まれ、20点台の医療補助員もあるが、日本の女子より明らかに職業アスピレーションが高いことがわかる。フランスの男子は80点台の一般医や建築士、70点台の科学専門職、システムアナリスト、ジャーナリストや、20点台の調理人を含み、平均は63点で、女子の平均の67点より低い。
 - 13 それぞれの国において、有意でない要因も分解しているので、要因すべての合計の効果となる。

【参考文献一覧】

- Blau, P.M. & Duncan, O.D. 1967, *The American occupational structure*. The Free Press.
- Esping-Andersen, G. 1990, *The three worlds of welfare capitalism*, Princeton University Press
- Gutman, L., Sabates, R. & Schoon, I. 2014, "Uncertainty in educational and career aspirations: gender differences in young people" in *Gender Differences in Aspirations and Attainment*.
- Looker, E.D. & Magee, P.A. 2000, "Gender and work: The occupational expectations of young women and men in the 1990s", *Gender Issues*, vol. 18, no. 2, pp. 74-88.
- Marini, M.M. & Fan, P. 1997, "The Gender Gap in Earnings at Career Entry", *American Sociological Review*, vol. 62, no. 4, pp. 588-604.
- Saha, L.J. 1982, "Gender, school attainment and occupational plans: Determinants of aspirations and expectations among Australian urban school leavers", *Australian Journal of Education*, vol. 26, no. 3, pp. 247-265.
- Schoon, I. & Parsons, S. 2002, "Teenage aspirations for future careers and occupational outcomes", *Journal of vocational behavior*, vol. 60, no. 2, pp. 262-288.
- Sewell, W.H., Haller, A.O. & Ohlendorf, G.W. 1970, "The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and Revision", *American Sociological Review*, vol. 35, no. 6, pp. 1014-1027.
- Sikora, J. & Pokropek, A. 2011, *Gendered Career Expectations of Students: Perspectives from PISA 2006*, OECD Education Working Papers, No. 57, OECD Publishing.
- Sikora, J. & Saha, L.J. 2009, "Gender and professional career plans of high school students in comparative perspective", *Educational*

- Research and Evaluation, vol. 15, no. 4, pp. 385-403.
- Vella, F. 1994, "Gender roles and human capital investment: The relationship between traditional attitudes and female labour market performance", *Economica*, pp. 191-211.
- Vella, F. 1993, "Gender roles, occupational choice and gender wage differential", *Economic Record*, vol. 69, no. 4, pp. 382-392.
- Vondracek, F.W., Silbereisen, R.K., Reitzle, M. & Wiesner, M. 1999, "Vocational preferences of early adolescents: Their development in social context", *Journal of Adolescent Research*, vol. 14, no. 3, pp. 267-288.
- 石田浩、近藤博之、中尾啓子 (ed) 2011、現代の階層社会 階層と移動の構造、2nd edn、東京大学出版会。
- 稲田雅也 2005、"職業威信スコアの評価基準構造の関連要因に関する研究"、*拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究*、vol. 14、pp. 1-14.
- 今田高俊 1999年10月号、"平等社会の神話を超えて—戦後日本の産業化と社会階層"、*日本労働研究雑誌*、vol. 472.
- 片瀬一男 2005、*夢の行方 高校生の教育 職業アスピレーションの変容*、東北大学出版会。
- 荻谷剛彦 1986、"閉ざされた将来像"、*教育社会学研究*、vol. 41、pp. 95-109.
- 杉橋やよい 2009、"男女間賃金格差の要因分解手法の意義と内在的限界"、*経済志林*、vol. 76, no. 4, pp. 53-79 .
- 太郎丸博 1998、"職業評定値および職業威信スコアの基本的特性"、都築一治 (編) *職業評価の構造と職業威信スコア 1995 年 SSM 調査研究会*、pp. 31-44.
- 中尾啓子 "地位達成モデルの東アジア国際比較" in *現代の階層社会 2 階層と異動の構造*、ed. 石田浩、近藤博之、中尾啓子、東京大学出版会、pp. 289-300.
- 中山慶子 1985、"女性の職業アスピレーション"、*教育社会学研究*、vol. 40, pp. 65-86, en279.
- 平沢和司 2011、"大学の学校歴を加味した教育 職業達成分析" in *現代の階層社会 階層と移動の構造*、ed. 石田浩、近藤博之、中尾啓子、2nd edn、東京大学出版会、pp. 155-170.
- 松本浩司 2008、"高校生の職業観の構造と形成要因: 職業モデルとの関連を中心に"、*キャリア教育研究*、vol. 26, no. 2, pp. 57-67.
- 元濱奈穂子 2014、*パネルデータを用いた職業アスピレーションと地位達成間の関連についての分析*、東京大学社会科学研究所。
- 元治恵子 2011、"職業評定の国際比較" in *現代の階層社会 2 階層と異動の構造*、ed. 石田浩、近藤博之、中尾啓子、東京大学出版会、pp. 301-316.
- 元治恵子 2004、"女子高校生の職業アスピレーションの構造: 専門職と女性職"、*応用社会学研究*、vol. 46、pp. 67-76
- 村松幹子 2000、"女子学生のライフコース展望とその変動"、*教育社会学研究*、vol. 66, pp. 137-155.